

少子高齢化が進む中、新しい高齢者居住を考慮した地域開放型賃貸住宅がオーブンした。その名も「荻窪家族レジデンス」だ。両親の介護を経験したオーナーが「受け継いだ不動産を使ってできる範囲で少しでもこの地域で最後まで暮らせるようなものを提供したい」と考え、建築家や福祉の専門家とともに建てた。今回は、この画期的なプロジェクトについて紹介する。

住みたいと思う施設がない

ゴールデンウィーク直前の祝日、4月29日。高級住宅地・東京都杉並区荻窪の新築賃貸住宅で内覧会が行われた。「地域開放型シエアハウス的多世代賃貸住宅」という一風変わったコンセプトの賃貸住宅「荻窪家族レジデンス」の内覧会には、午前中だけの公開にもかかわらず、約50人が訪れた。

「いろいろな老人向けの施設もありますが、お年寄りだけ困われたところよりも、子供も若者も犬も、自然な感じでそばにいてほしいと思いました」

当日来訪者向けに開かれた説

明会で、同建物のオーナー瑠璃川正子氏はこう話した。

瑠璃川オーナーは両親の介護を経験し、これからの医療・介護事情や、一般的な家庭の介護多かつたこともあり、親の介護力などを知った。「自分は4人姉妹、夫も5人兄弟で、人数が

も家族の協力を得やすかった。また、当時はまだ介護保険を使いやすい時代だった。しかし、これから介護をする人たちは、大変です」(瑠璃川オーナー)

そのため、親から受け継いだ母屋と老朽化したアパートの建て替えを契機に、同建物を建てることにしたのだという。

交流拠点「百人カサロン」

約200坪の土地に建てられたRC造3階建ての建物は、賃貸住戸14戸とオーナー宅の計15戸が入っている。最大の特徴は、

こうした「まちに開いた」スペースは、入居者以外は「百人カサロン」のメンバーリストとして会員登録を受講したり、自分で講座を開催することも可能だ。

まさに、同建物は地域住民同士はもちろん、この建物に住む入居者と地域住民との交流の場語つた。

「地域開放型」とうたっているように、建物の一部を「まちに開いた」点だ。具体的には、1階にある集会室、アトリエ、ラウンジが入居者以外の人でも利用できるスペースとなっている。入居者の作品「ちぎり絵」

が飾つてあるラウンジではコーヒーを飲んでくつろいだり、シアライブラリー、お気に入りの本や資料を置ける「MY書棚」がある。アトリエは工作や手仕事に関する機器のそろつた空間で、趣味を思う存分楽しめる。集会室は、集会のみならず子育て支援や保険相談など、さまざまな使い方を想定。片側の壁は大きな鏡となっているので、ヨガや太極拳の練習もできる。地域活動やパーティなどの集い、講座を受講したり、自分で講座を開催することも可能だ。

こうした「プロジェクトの段階からワークショップを重ねながらいろいろな人と一緒に作り上げてきました。未完の状態ですが、これから住む方たちでつくりあげていきたいですね」と同建物の設計を担当した連健夫氏は



「荻窪家族レジデンス」の外観